2026年4月26日(日)
中国新聞SELECT掲載

# JICAだより

ヨルダン
東沢虹呼里（にこり）さん(29)
滋賀県大津市出身

## 言葉の壁越え 思い届け

ヨルダンのパレスチナ難民キャンプにある女子小学校で2、3年生に体育と美術、音楽を教えている。赴任から1年になるが、今でも公用語のアラビア語に苦戦している。

当初は準備した授業原稿を読み上げても、児童は「ポカン」とした表情で、指示や思いが伝わらず大騒ぎするばかりだった。私は彼女たちの言葉が十分理解できなくても根気強く耳を傾け、正確な発音ではないけれども一生懸命に言葉を伝え続けた。そして、気が付けば心が通じ合っていることを学んだ。

女子小の児童に日本文化を紹介する筆者（中央）

今では私の拙いアラビア語とジェスチャーから思いをくみ取り「ナスマ（私のアラブ名）が言っているのはこうだね」と代弁してくれる多くの児童たちに日々支えられている。お手伝いが大好きで必要なサポートを見つけ、率先して行動する姿は頼もしく誇らしい。

一方、ある授業では児童があまりにも好き勝手に行動し、手に負えなくなったことがあった。情けなくも「もう次から体育はなし！」と児童に言い放ち、授業後、すぐに担任に状況を説明した。担任は興奮する私の言葉を一切遮ることなく、最後まで聞いてくれた。

私が紡げるとてもシンプルな言葉から「ナスマはきっとこういうことを言いたいに違いない」と推測を重ねてくれたのだろう。その苦労を思うと、私が気持ちを伝え切るまで一度も目をそらさず、真剣に向き合ってくれた、担任の優しく、温かい気遣いを今でも忘れることはできない。

また職員室での雑談中に「誰か英語に訳してあげて」という声が出ると「ナスマは理解している」と何度も擁護してくれる先生がいた。職員会議で「ナスマは理解できないから」とアラビア語の資料が配布されなかった時、校長先生は配布するよう伝えてくれた。

言葉が話せず困難に直面したとき、つらくて心の中で泣いてしまうこともある。けれども、必ず誰かが手を差し伸べてくれる環境に自分はいる。そう思うといくらでも力が湧いてくる。大好きな先生、児童のみんな、本当にありがとう。